

(凧揚げの子)
(掌編
改変版)



11年前、12年間続いた心の病が底を打って以来、その後3年間、感情鈍麻の後遺症が残っていて、頭の回転も今ひとつの状態でした。

そんなぼんやりした感覚に覆われていたので、底は打ったものの、どちらに向かって歩いて行けばいいのか分かりませんでした。

何かを見つけない思いからか、以前から趣味だったカメラを持って、あちこち歩き回っていたのですが、3年前のその年のお正月に、最寄り駅から一本で行ける片瀬江ノ島海岸の東浜に海の風景を撮りに行きました。

行くと、思いもよらず、浜いっぱいに親子連れが拡がって、お正月の凧揚げ大会を遣っていたのです。

しばらくすると、お昼時になり、そこで、家族がお弁当をひろげて食べ始めました。見ていると、その中に、独りでコンビニ袋から取り出した出来合いのお弁当を食べている小学校四、五年生くらいの女の子がいました。家族で来ているほかの子達は、みんなお母さんお手製のお弁当をおいしそうに食べている中で、なんとなくその子のことが遠目にも気になり、しばらく見るともなく見ていました。

すると、そこへ、同じ歳くらいの女の子がやってきて、その子を浜辺に引っ張り出すと、まずその子が、自分で凧をあげ、凧が風に乗ると、その凧糸を先ほどのひとりぼっちでコンビニ弁当を食べていた女の子に渡し、渡した子が元を押さえて、渡された子が舵を取りました。

凧はお正月の浜辺で、真っ青な空の中、面白いうように泳ぎ、次第にぐんぐん上がっていききました。

それを見たコンビニ弁当の女の子の顔。

たこの高さと同じように、どんどん明るく晴れやかになっていったのです。

何もかも忘れて、何かずっと先を見ているような明るい笑顔。

嬉しくなりました。何か胸が詰まりました。そうして

「みんながこういう顔になるような仕事をこれからしていけたらいいかもしれない」
非常にぼんやりとではあったんですが、なんとなくそれまでとは何か切り替わったような感じがしました。丁度「角を曲がった」とでも言うのでしょうか、気がつくのと、既に景色が切り替わっていて、それまでのことが「過去に属している」ように思えたのです。

今の時点から語ると、そういう表現になりますが、その時はまだはつきりとした自覚はありませんでした。

ただ、周りの海や空や親子連れの姿が、まるで自分を覆っていた膜でもとれたかのように突然、自分の中にすーっと流れ込んできて、何か直接こころの肌に触れたような感触を得ただけは覚えています。